

BOOK REVIEW



英語教科書は〈戦争〉を どう教えてきたか

江利川春雄 (研究社, 2,376 円)

この本は著者が約30年かけて集めた数千冊の英語教科書を元にして書かれたものである。明治以降を大きく4つに分けて各時代を映し出す教科書の本文や挿絵がたくさん紹介されている。

初めて目にする珍しい現物資料に引きつけられて拾い読みするうちに気づいたら全頁を読み終えてしまっていた。著者は当時の学生のレベルの高さを知るために英文も読むように勧めているが、私は早く次頁が読みたいと英文の和訳だけを読んでいった。英語教師にあるまじき読み方かもしれないが、それほど知的発見に溢れる内容だったということだ。そんなふうにしたのは内容のおもしろさに加えて人名や難読漢字にルビがふってあったからだ。親切な配慮もうれしかった。

本書で紹介されていた資料で私にとっていちばん衝撃的だったのは、明治初期に使われたという『ミッチェル新学校地理』である。この中には「文明5段階説」という説が登場し日本人は中国、トルコ、ペルシアとともに「野蛮人」「未開人」「半文明人」「文明人」「開化人」の中の「半文明人」として位置づけられている。この言説は福沢諭吉らの知識人に大きな影響を与え「文明開化」という言葉の由来にもなった。文明開化を「皮相上滑りの開化」と批判していた夏目漱石ですら西洋人のことを「体力能力共に吾らより旺盛」と捉えていたと本書は指摘している。

この「開化人」に対する劣等感こそ

が明治以降の日本人を近代化に突き動かした源にあったと推測される。ところが、その「開化人」とされた欧米の国々が当時やっていたことはアジア、アフリカ、中南米を植民地支配して搾取虐待することだった。そして日本は彼らの行動を手本にしてアジア諸国に軍隊を送り出し戦争に明け暮れることになる。

敗戦後70年間の日本は平和憲法のおかげで直接には戦争に巻き込まれず、いまや和食、アニメ、LED等々の「ソフト・パワー」を誇る国になった。また言語学者の鈴木孝夫氏のように「〈やわらか、あいまい、情緒的〉な日本文明の出番だ」と主張する人もいる。欧米を手本にする必要はもうないということだ。それにも拘わらずいま日本を再び欧米並みの戦争ができる国に戻そうとする動きが起こっている。悲しむべきことだ。本書で明治以降の英語教科書の変遷をふり振り返りながら私はそんなことも考えさせられた。

山田 昇司 (やまだ・しょうじ 朝日大学)